

令和3年度 連携研究スキームによる研究（政策研連携研究課題）
評価報告書

研 究 テ ー マ 名	ポスト新型コロナウイルス時代における食料安全保障のあり方に関する研究のうち「食料の安定的な確保のための国際市場に関する研究」
政策研連携研究課題名	安定的な穀物等の調達に向けた企業行動と国際需給に関する研究
研 究 実 施 期 間	令和2年度～令和4年度
研 究 の 概 要	（研究の目的・達成目標） 南米地域における日系穀物商社等の穀物等の調達・事業戦略を把握するとともに、我が国の穀物を輸入している実需企業の安定的な原料調達に向けた企業動向調査を実施する。その分析に基づき、安定調達に必要な方策を解明するための含意を得る。 （研究の内容および実施体制） ① 穀物調達戦略および投資戦略に関する分析 日系総合商社の南米南部における穀物調達戦略や投資戦略の分析に取り組む。 ② 日系食用油メーカーの事業戦略や穀物輸入戦略の分析 穀物需要者である日系食用油メーカーの事業戦略や穀物輸入戦略の分析に取り組む。 ③ 世界の食料需給見通しや食料需給動向の分析への活用 ①及び②で得た定性的な知見を世界の食料需給見通しや食料需給動向の分析に活用する。 （委託研究との連携の意義、期待される波及効果） 農林水産政策研究所が知見として有していない北米地域における穀物等の調達や、穀物等の需要者にあたる配合飼料業界や畜産部門の現場の動向について、委託先と連携することで、①研究手法の精緻化や補完を行うこと、②我が国の穀物等に関する輸入の調達から加工・流通の各段階を的確に俯瞰・描写することで本課題のインプリケーションを得ることが可能となる。
評 価 結 果	【評価項目ごとの評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。
○評価委員会名及び開催日	○ 社会的ニーズへの対応

ポスト新型コロナウイルス時代における食料安全保障のあり方に関する研究のうち「食料の安定的な確保のための国際市場に関する研究」評価委員会 令和4年3月9日開催 ○評価委員名 坪田 邦夫 委員 (日本農業研究所・客員研究員) 清水 純一 委員 (ノートルダム清心女子大学人間生活学部・教授) 石井 圭一 委員 (東北大学大学院農学研究科・准教授) ○評価基準 ・社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある A:大きな意義がある B:意義がある C:意義が小さい D:意義は見出しがたい ・政策の企画・立案への貢献 S:非常に大きな貢献が見込める A:大きな貢献が見込める B:貢献が見込める C:貢献が小さい D:貢献は見込みがたい ・学術面からみた研究成果の評価 S:学術的に非常に高く評価できる A:学術的に高く評価できる B:学術的に評価できる C:学術的な評価はやや低い	S:非常に大きな意義がある (1) A:大きな意義がある (2) ○ 政策の企画・立案への貢献 A:大きな貢献が見込める (3) ○ 学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる (1) B:学術的に評価できる (2) ○ 研究計画の妥当性 A:妥当である (2) B:概ね妥当である (1) ○ 研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である (2) B:概ね妥当である (1) ○ 研究目標の達成度 A:達成度は高い (3) 【総合評価】 ()内は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題はない (2) 2:ほぼ順調であるが、改善の余地がある (1) 【評価委員からの主な意見】 ○ 南米の日系商社と日本の搾油メーカーに的を絞った本件の研究計画は、政策研のリソースを考慮した現実的な選択であり、現地調査が困難であるにもかかわらず、研究の進み具合から見て十分な成果が期待できると思われる。ただ、上位研究テーマの全体計画からすると、対象や範囲が相当限定されているので、同じテーマの下で別途行われる委託研究との相互参照と保管は不可欠であり、最終報告はバラバラではなく、上位研究テーマに沿った一貫したとりまとめになることを期待する。 ○ 昨年も指摘したことだが、日本の食料安全保障にとって、南米からの穀物・大豆を安定的に輸入することが重要な問題であることに疑いはない。本年度は同じコロナ禍ではあるものの、昨年度より研究が進捗していることがうかがえた。大豆油の分析に関しては、評価自己記録票に記載されているように、いずれは大豆油そのものを輸入する選択肢も考えられる。その場合、ブラジルと異なり、大豆粒ではなく、大豆油にしてから輸出をしているアルゼンチンの動向も考慮に入れる必要があるのではないかと。 ○ 政策研のメンバーがブラジル担当の1人だけであり、アルゼンチンやパラグアイの国別担当者が入っ
---	--

D.学術的評価は低い ・研究計画の妥当性 S.非常によい A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 S.非常に良い A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.見直しが必要である ・研究目標の達成度 S.達成度は非常に高い A.達成度は高い B.概ね達成している C.達成度はやや低い D.達成度は低い ・総合評価 1.順調に進行しており、問題ない 2.ほぼ順調であるが、改善の余地がある 3.計画等を変更する必要がある 4.中止すべきである	ていないのには理由があるのだろうか。 ○ 最終年度に向けて、研究テーマ全体のストーリーや成果の章別構成など進捗を計れる工夫をしてほしかった。国際市場の混乱が予想される中、社会からの関心も高まっている。当該テーマに関する専門家を政策研内外から結集した連携研究グループであり、最終成果に期待したい。 ○ 最終年度にあたっては、政策提言など行政部局に対して宿題を提示することを期待したい。 ○ 食料の安定供給という観点から商社の行動原理を説明することは、政策立案に大きく貢献できるものとして予想される。 ○ 大豆や穀物について世界有数の生産・輸出余力を持つ南米地域は、穀物メジャーや商社等による調達の駆け引きの第一線の場合でもある。日系商社や植物油メーカーの調達戦略と取引の実態把握と分析は、我が国食料輸入政策の検討・立案に大きな貢献が見込まれる。 ○ 米中対立、ロシアの侵攻、気候変動など、今後も世界の食料需給には大きな不安定要因があり、自給率の低い我が国にとって輸入食料の安定確保は不可欠。主要調達先の一つである南米の穀物・大豆の需給や実際の取引に関わる商社や実需者の分析の意義は大きい。 ○ 既存の研究では、大豆全体としての輸入量などは分析されてきたが、その背景にある、商社や実需者などの行動はブラックボックスであり、非常に学術面での評価は高い。 ○ 提出された参考資料からは総合商社や植物油メーカーが穀物・油糧種子バリューチェーンの中でどこを重視するかという事業戦略の違いや競争優位の分析が試みられており、学術面でも一定の知見をもたらすことが期待される。 ○ 研究対象の範囲が狭いので、生産国の経済・政策との関係や外国企業の戦略との違いも対象に入れると分析の厚みが増すのでは。 ○ 参考資料が添付されているので、それを読めということなのだろうが、「研究成果等概要報告書」には学会報告や論文掲載の予定しか書いておらず、なにが明らかになったかを簡単に記載すべきではないか。 ○ この研究は上位研究テーマの一部であり、政策研のリソースの関係で北米での商社行動や実需者分析は別途委託としたのは妥当な判断。ただ対象が異なり、
--	---

	手法も必ずしも同一ではないので、全体管理と取りまとめ PO や総括責任者の負担が大きいのではないかな。
今 後 の 対 応 方 針	○ 日本の南米における穀物・油糧種子主要調達国であるブラジルを対象とし、これまで取り組んできた我が国の総合商社・JA 全農による調達戦略や穀物・油糧種子バリューチェーンにおける農業生産者の成長に関する研究のほか、プロ研で実施してきた同国の農業政策や農業発展史研究をもとに、令和 4 年度の総括に取り組む。 ○ 令和 3 年度末に日本農業経済学会にて本研究課題として提起したブラジル穀物・油糧種子バリューチェーンの上流に当たる農業資材部門に対する総合商社の戦略について、2022 年 7 月に日本農業市場学会で個別報告・論文投稿を実施する。 ○ 我が国の植物油メーカーの動向について、令和 4 年度に東京農業大学の紀要に投稿。 ○ 委託先と確り連携し、令和 4 年度に最終成果として本研究の書籍刊行を実施する。